

48 百目鬼

伝承地：埴田1丁目、2丁目

話者：4・11 参考書籍：1・3・4・7・8



(百目鬼の掛け軸と爪)

現在の県庁の東側埴田の一部を「百目鬼」と呼んでいるが、百目鬼の地名の起りとして、「百穴で有名な長岡に住んでいた鬼が、鬼の世界から抜け出した」と思い、埴田に現在もある本願寺へかよい仏門に帰依したところ、ついに人間界に人間として生まれかわることができた。ところが、その鬼は百匹の鬼の頭目であったことから「百目鬼」と呼ばれ、いつしか百目鬼が人間に生まれかわることができた本願寺周辺を

百目鬼という地名で呼ぶようになった。」という話がある。

この話しを、もっと詳しくしたものと考えられる次のような逸話がある。

平安時代のなかごろ、田原藤太藤原秀郷が宇都宮に館を築いたといわれるころの話です。

ある日の夕方、秀郷が、田川の方へ歩いていくと、突然、白髪の老人が姿を現し大曾という部落の北西にある兎田という馬捨場で、待っていてほしいと告げました。秀郷は、その場所でしばらく待つと、3m余りもある大きな鬼が現われ、死馬に食いつきました。50mほど離れた所から様子を見ていた秀郷は、やがて満月のように弓を引きしぼり、鬼の胸板を射通した。逃げる鬼を追っていくと、明神山の後方に倒れ伏していました。鬼の体からは火炎が吹き出し、耳もとまで裂けた口からは黒い毒気を吐くため、近寄ることはできず、城へ引きあげた。翌朝、出向いてみるとその姿はなく、その場所は落雷に会ったように、ものすごいものでありました。

それから約400年後、足利將軍の時代に、埴田村の本願寺に、住職が定住すると火事がおこるとか、ケガをするということが必ず生じました。そこで、決まった住職はおかずにいましたが、智徳上人という徳の高い坊さんが住職として住むことになり、熱心に説教するようになりました。

すると、その説教に、毎日必ず姿を見せる若く美しい女性がいましたが、その正体を上人は見抜きました。秀郷に胸を射抜かれた鬼で、長岡の岩山で病気の治療をしていましたが、ようやく全快したので、むかしの威力を得るために、この場所で流した血を吸い取らねばと毎日来ていたのでありました。住職が寺にいたのでは邪魔になるので、火をつけたり、坊さんを傷つけたりしていたということでした。正体を現した鬼は、毎日話を聞いているうちに上人を寺から追い出せなくなると、角を折り、指の爪を取って上人に捧げました。

それから、この付近を「百目鬼」と呼ぶようになったのです。

